

□平成 20 年 6 月 14 日 午前 8 時 43 分

## 岩手・宮城内陸地震への対応と課題

—その時、奥州市は揺れ動いた！そして、立ち上がった—

岩手県奥州市市民環境部消防防災課 原 田 福 一

「ゴゴッ」という今まで聞いたこともない地鳴りと同時に、天地がひっくり返るのではないかという、大地の揺れが一瞬の内にきました。生きた心地がしない。何なんだ！これは。

ものすごい揺れの振動が細かい大きな「ドラムのものすごい速さの音のような激しい」縦揺れだったと思いますが、一瞬のうちにドカーンと来て、家の中にいた私は、柱にしがみ付いているのが「やっと」でした。

何分間つづいたのだろうか。家の中は大丈夫か、と確認する暇も無く、すぐさま自家用車に乗って「大変なことが起きた」と思い市役所に向かいました。途中、通行してきた道路に電信柱が倒れていないし、家屋も倒れていないことを確認しながら、気は急(せ)くのでした。道路には、びっくりして外に飛び出した人達が集まって、話しあっていました。

これから、長い長い不眠不休の、どうなることか先が全く見えない奮闘が始まり、頭がボーッとして、日々と曜日が一致しない現象が毎日のように続きました。「今日、何日だっけ、何曜日だっけ」と近くで作業している人に聞くことが続きこの繰り返しで 20

日間は過ぎました。夜は、室内とはいえ机と椅子にもたれたり、新聞紙を床に敷いて眠りました。これらに係る、市役所の用意は事前には全く出来ていませんでした。

地震発生当日は土曜日でもあり、市役所は閉庁日で、災害対応としての職員は未だ 2～3 人しか登庁していませんでした。すぐに、駆けつけてきた職員で市役所 3 階の対策本部となる場所にテーブルを並べたりパソコンを設置したり無線・ホワイトボード・コピー機械等を配置し、徐々に職員がはせ参じてきて情報収集が始まりました。

続々と職員も集まってきて「大変なことが起きた」という緊迫感が、ただよっていました。テレビの報道での航空撮影報道や電話で怪我人や家屋被害の情報に入りましたが、西山の方面(旧胆沢町、旧衣川村)が相当ひどくやられていそうでした。映し出される画像には、山が崩れて土砂の肌がむき出しになり、いたるところが寸断されているようでした。

訓練では、何回か対策本部を設置し、昨年の北上川大洪水でも大規模な対策本部を経験しましたが、予告も無しにこんなに大きな災害が降りかかるとは…なんてこった!!。

なんてこった!!。

休みで、焼け石岳方面に登山やバスで山に入っている団体の転落情報が入り、県の災害対策本部とのやりとりでヘリコプターとの連絡や、事故発生現場の確認に時間を要し、「じれったいな」「これが現実なのか」と何度思ったことだろうか。

また、横浜から緊急消防援助隊の部隊が、市災害対策本部に時間を置かず到着したのには、本当に驚きました。発生の報が入ると同時に、ヘリコプターを乗り継いできたと説明を受けました。この英断に本当にうれしかったのを覚えています。これが現実なんだ……。

新聞社やテレビ局が多数一斉に本部に来て、緊迫感は大変なものでした。

迷彩服の自衛隊員が災害派遣車両と共に、多数市役所に到着し、現地本部を設置し、無線を設置し活動を始めました。

一関市が震源地で20キロメートルくらいしか離れていない、旧水沢市役所の場所にある奥州市役所本庁の回りの市街地は建物等の倒壊も無く、激しい揺れが収まると被害がすぐには見当たらないため、地震の後というのがわからず、緊急車両の部隊や人、国や県の各機関の対策員・市役所の人々の忙しく動き回る姿やヘリコプターの飛び回る音がものすごい程度でした。

しかし、市役所から2 km南にある水沢高校の近くに、地域医療の中核となる県立胆沢病院があり、胆沢の石淵ダム方面の道路から転落したバスの乗客を運ぶ離着陸場になった校庭付近では、大怪我をした負傷者を緊急に運ぶヘリコプターの音とその地震のものすごさを、浮き立たせていました。

災害対策本部長(市長)以下、災害対策本部員会議が始まり、各部長から報告を求めても情報が錯綜し、人的被害の状況、水道が出ない、家の裏の山が崩れそうだ。山が崩れて川がせき止められている、崖が崩れた等々、とにかくどうなっているかの情報収集が不明の状況で、混乱状況は、その後3週間は続きました。と同時に、全国から奥州市に対する激励の物資が続々と集まり、おにぎりや日用品の善意が差し入れられると「その励ましに、胸が熱くなりました」。「奥州市は一人じゃないんだ、皆が応援してくれているんだ」ということを実感しました。

電気や電話等に被害が少なく、情報の孤立化が生じなかったことや、電線の破損等がなく、夜間でも電気がついていることへの「希望の光」にも通じる、暖かさというものが身に染みしました。

災害対策から災害復旧へ、そして復興へ向かっている現在、どうなるか全く先が見えなくても、時間さえあれば人間の英知を結集して立ち向かえば、何とかなるものだとつくづく思うようになりました。また、こういうときだからこそ、全国の人々の応援のありがたさ、支えられて生きていること実感をいたしました。

その後、罹災した方々のケアや支援にはさまざまな問題も発生していますが、制度の壁を乗り越えて過去の教訓を参考としながら、頑張っています。

岩手県を離れて生活している大勢の方が大変心配しているだろうことは、想像に難くないところですが、大丈夫です。半年が経った現在、奥州市は全国の皆様方からの、暖かいご支援や励ましをいただいて、「災い転

じて福と成す』のとおり、現実をしっかりと受け止めて、立ち上がっています。どうか、安心してください。そして、笑顔で「お帰り

なさい」とお待ちしております。奥州市は元気です!!。